

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 21 日

所 属： 生命・環境科学部 環境科学学科

氏 名： 村山 史世 職位： 准教授

役 職：

## I ティーチング・ポートフォリオ

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

環境科学科および全学部全学科の 1・2 年生向けの教養科目・導入科目を主に担当している。高校までの学修と専門科目の接続時期の学びを担当している。学生には広い視野と「学び方を学ぶ」ことを身につけてもらうのが、主たる役目となる。また衛生行政学や SDGs など、専門知識をつなげて総合化する手法を考えてもらうことも教育的な責任である。

ジェネプロ「SDGs Science Shop」で環境科学科 1 年生 1 人を受け入れている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
フレッシュャーズセミナー	環境科学科	必修	1	68
人権論	環境科学科	選択	1	63
法学入門	環境科学科	選択	1	71
SDGs と未来共生科学	環境科学科	選択	1	65
地球環境科学	環境科学科	必修	1	69
地球共生論	全学部・全学科	必修	1	570
日本国憲法	全学部・全学科	選択	1・2	114
地域コミュニティ論	環境科学科	選択	2	29
環境フィールドスタディ	環境科学科	選択	2	27
科学技術英語	環境科学科	選択	3	2
衛生行政学	環境科学科	必修	3	51
インターンシップ	環境科学科	選択	3	2
リサーチローテーション	環境科学科	選択	2	76
卒業論文	環境科学科	選択	3・4	3・5
SDGs と未来共生科学	環境科学科	自由	4	0
地球共生系データサイエンス・同演習 I	全学部・全学科	自由	2	24
科学者・研究者論	環境保健学研究科	必修	1	21

## 2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

・学生を支援しても支配しないことを心がけている。私は大学院博士課程で指導教授からアカハラ・パワハラを受けた経験がある。指導教授は私を支配しようとした。その後アメリカに留学した時に指導教授は「君は何しにアメリカに来た？私は君にどんな何を支援できるのか？」と接してくれた。支援と支配に関して、私には恩師と反面教師がいる。

・学生の意欲を大切にす。意欲は学力の基盤、学ぶこと、生きることのエンジンであり、意欲があれば、学生は自ら学び続ける。

・学ぶ意欲につながるような学ぶことおよび学び合うことの楽しさと自己肯定感を学生に体験してもらおう。

・学びは、教員が企て、学生が完成させる。この相互作用のコーディネートが教員の責任である。良い相互作用が生じる学習環境に気を配りたい。

・学生が卒業後も自立して生きてゆくためには、学び方を学ばせ、学生の興味・関心を尊重してゆきたい。

・講義は、学生が世界で生きてゆくための準備であり、手段である。講義を自己目的化するべきではない。

## 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

### 方針

- ・対面授業でも、オンライン授業でも、「共に学んでいること」を体験させたい。
- ・相互評価や相互参照、対話を通じて、協同的な学びを実現したい。
- ・学生が自分で問いを立てて、自分で調べ、自分で考えて、自分で回答を見つけて、理由を自分の言葉で表現できるように教員として支援してゆきたい。
- ・14回の講義が終わったのちに、学生に遺るものを考えて講義したい。
- ・大学で学んでいることと現実世界がつながっていることを学生に体感させたい。

### 方法

- ・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで評価することにした。
- ・期末レポートの課題提示を授業開始後2か月半に行い、学生に学びの期間を確保した。
- ・授業は録画して、学生が復習できるようにした。

### 授業の資料について

- ・スライドはPDFにして学生が見返せるようにした。
- ・毎回の出席課題において、発問によって授業内容を振り返り、期末レポート等への準備ができるようにする。

- ・出席課題で出された学生の疑問や質問、意見に応えるような授業構成にした。
- ・現実の事件や事例などを授業の教材にして、現実世界とのつながりを意識してもらうことにした。

#### 授業の進め方について

- ・知識の一方的伝達だけを強調しないで学生が考えたり、調べたりするワークや時間を確保している。
- ・学生の発言や想いを拾い、学生と共に言語化をする。

#### アクティブラーニングについての取組

- ・環境フィールドスタディでは、ディスカッションの確保、調べもの学習や外部へのプレゼンテーションなどを行う PBL を実施した。

#### ICT の教育への活用

- ・学理および AzaMoodle で課題の相互参照が可能なようにさせている。
- ・Google AppSheet を活用した GIS アプリでの実習を取り入れている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））  
現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

②学生の理解度の把握（A～C）

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

⑤双方向授業への工夫（A～C）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

すべての項目で B（実施しているが十分でない）である。

担当している科目が主に 1・2 年生の教養科目であり、選択科目である。必修と異なり、学生自身が選択して履修している。最後まで履修する学生は、毎回の出席課題もよく調べ、よく考え、質的にも量的にもたくさん書いており、深く学んでくれている。

2021 年の GP 平均 1.74、単位未修得率 30.43%であったが、2023 年前期では GP 平均 2.48、単位未修得率 16.39%に改善した。今後は、単位未修得率を 15%以下にしてゆきたい。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

## 5.学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

・一昨年度から、課題の量や質が学生への課長な負担にならないよう心掛け、毎回の出席課題と期末レポートだけで評価するようにした。この形式は令和5年度も維持した。

② ①の結果はどうでしたか。

・授業評価では、毎回のコメントや早めの課題提示などが評価された。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

・暗記型ではなく、毎回考えてもらうような出席課題と、得た知識を活用することで取組が可能となるような課題で評価するという、昨年設定した方針を継続したい。

## 6.学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。）

・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで、深く考え、論理的に記述してもらうことで、暗記型知識ではなく、体系的知識と、現実世界においても活用できる知識を身につけさせる、という方法は今後も継続する。

・学生が言葉にできなかったり、しななかったりする気持ちや価値観にも配慮する。

・課題やレポートの未提出学生にはメールで呼びかける。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

- ・学生からの授業評価や毎回の出席課題では、出席課題へのフィードバックが評価された。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

- ・教務課主催のFDへの出席率は、昨年度よりも下がった。授業数は増えた今年度は、FDへの参加自体が負担に感じた。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

- ・短期的には学生の満足度をあげたい。
- ・中期的には、協同学習につながるような、教育手法を開発してゆきたい。
- ・また、知識の伝達だけでなく、学生が学びを楽しめるための手法の開発をしてゆきたい。
- ・自らは、ファシリテーターとしての技量をもっと豊かにしてゆきたい。
- ・長期的には、暗記力では評価できないような知識の定着と評価方法を試みたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。  
シラバス。学理にアップした動画、教材、出席課題。学生のプレゼンテーション動画。